

【 復活のトロパリ 第1調 】

きゆ うせ いしゆよ、イウデヤのひとはかを
 救 世 主 人 墓
 ふ うじて、へいそつなんぢのいさぎよきみを
 封 兵 卒 爾 潔 軀
 ま も る と き、なんぢはみっかめにふくか
 守 時 爾 三日目 復 活
 して、せかいにいのちをたまえり。
 世 界 生 命 賜
 ゆ え にてんぐんはなんぢいのちをほどこすの
 故 天 軍 爾 生 命 施
 しゆによべり、ハリストスよ、こうえいは
 主 呼 光 榮
 なんぢのふくかつにきし、こうえいはなんぢ
 爾 復 活 歸 光 榮 爾
 のくににきす、ひとりひとをいつくしむ
 國 歸 獨 人 慈
 しゆよ、こうえいはなんぢのおもんばかりに
 主 光 榮 爾 慮
 きす。

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神智 役者 聖
 なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
 神撰 笛 愛
 にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光
 しょうしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教聖
 よ、なんちのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及
 ぜんせかいのために、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生 命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸
 す、
 せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
 成 聖 者 亜使徒聖 我
 くになんちをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなをし、かれらにか
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩 寵 與 教 會 建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり
今 此 教 會 爲 祈

たまえ、けだしわれらそのしよしはなん
給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼 我 善 牧 者 慶

べよ。

【 復活のコンダク 第1調 】

いまもいつもよよに、アミン
今 何 時 世 世

しゅさいよ、なんぢはかみなるによりてこう
主 宰 爾 神 因 光



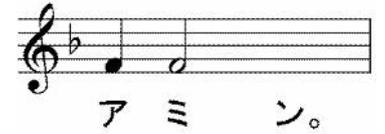
えいのうちに はかより かくかつし、せせ
榮中 墓 復 活 世 世
かいをももに かくかつせしめ たま えり。
界 借 復 活 給
ひとのせいはいは なんぢをかみとしてほめう
人 性 爾 神 讃 歌
たい、しはほろぼされ、アダムはたのし
死 滅 樂
み、エヴァはいま なわめよりとかれ
今 縛 釋
てよろこびてよぶ、ハリストスよ、なんぢ
観 呼 爾
はしゅうじんに かくかつを たもうしゆなり。
衆 人 復 活 賜 主

司祭) (黙誦： 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくい ため つうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者と
しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生

しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しよせいじん きとう よ
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐
よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖
な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐
め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅
せ い な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せい しん
光 榮 父 子 聖 神
に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：^{しゅ}主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、^ざヘルヴィムに座する者よ、^{なんぢ}爾は其國
 の^{こうえい}光榮の^{ほうざ}寶座に在りて恒に崇め讃めらる、^{いま}今も何時も^{いつ}世に、^{よよ})

【 ^{プロキメン} 提綱 主日第1調 】

司祭) ^{つし}慎みて^き聽くべし、^{しゅうじん}衆人に^{へいあん}平安、

誦經) ^{なんぢ}爾の^{しん}神にも、

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{しゅ}プロキメン、^{われらなんぢ}主よ、我等爾を^{たの}頼むが^{ごと}如く、^{なんぢ}爾の^{あわれみ}憐を我等に^{われら}垂れ^た給え、^{たま}

しゅ よ 、 われらなんぢをたのむがごとく、
 主 我 等 爾 頼 如
 なんぢのあわれみをわれらにたれたま
 爾 憐 我 等 垂 給
 え 。

誦經) ^{ぎじん}義人よ、^{しゅ}主の^{ため}爲に^{よろこ}喜べ、^{さんえい}讚榮するは^{ぎしゃ}義者に^{かな}適う、

しゅ よ 、 われらなんぢをたのむがごとく、
 主 我 等 爾 頼 如
 なんぢのあわれみ を われらにたれたま
 爾 憐 我 等 垂 給
 え 。

誦經) ^{しゅ われらなんぢ たの むがごとく} 主よ、我等爾を頼むが如く、

なんぢのあわれみ を われらにたれたま
 爾 憐 我 等 垂 給
 え 。

【 アポστόロス 使徒經 188 端 コリント後書 9 章 6 節～11 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ こうしょ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい とぼ まもの とぼ か ゆたか まもの ゆたか か ひとのおのそのところ} 兄弟よ、乏しく稼く者は乏しく穡り、豊に稼く者は豊に穡らん。人各其心の

^{ほつ ところ したが うれい よ あら し な あら ほどこ けだしかみ たのし} 欲する所に随い、憂に由るに非ず、強いて爲すに非ずして施すべし、蓋神は樂

^{あた もの あい かつかみ なんぢら しょおん と よく なんぢらつね およそ} みて與うる者を愛す。且神は爾等を諸恩に富ましめんことを能す、爾等常に凡の

^{こと おい た およそ ぜんじ な ゆたか ため しろ ごと いわ} 事に於て足らざるなくして、凡の善事を爲すに饒ならん爲なり、録されしが如し、云く、

^{かれ さん ひんじゃ ほどこ そのぎ よよ せん まもの たね あた しょく ため パン} 彼は散じて、貧者に施せり、其義は世に存すと。播く者に種を與え、食の爲に餅

^{そな もの ねが なんぢら ま たね そな かつふや またなんぢら ぎ み ま} を備うる者は、願わくは爾等が播く種を備え且殖し、又爾等の義の實を益さんことを、

^{なんぢら およそ こと と よ ひろ ほどこ え ため こ われら よ しみ たてまつ} 爾等が凡の事に富むに由りて、博く施すを得ん爲なり、此れ我等に由りて神に奉る

^{かんしゃ な} 感謝を作す。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。「彼は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりでである。種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。

【 アリルイヤ 主日第1調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

Arieleia, Arieleia,
Arieleia.

誦經) ^{ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう} 願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃頌せられん、

Arieleia, Arieleia,
Arieleia.

誦經) ^{おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ} 大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世々に

^{た もの われなんぢ な うた} 垂るる者よ、我爾の名に歌わん、

Arieleia, Arieleia,

^{かれらみ} ^み ^き ^{さと} ^{ため} ^こ ^{たとえ} ^ぎ ^さ ^{ごと} ^{たね} ^{かみ} ^{ことば}
 る、彼等視れども見ず、聴けども悟らざる爲なり。此の譬の義は左の如し、種は神の言
^{みち} ^{かたわら} ^{もの} ^こ ^き ^{のちあくまきた} ^{そのころ} ^{ことば} ^{うば} ^{かれら}
 なり。路の 旁の者は、是れ聴けども、後 悪魔來りて、其 心より言を奪う、彼等が
^{しん} ^{すく} ^{ため} ^{いし} ^{うえ} ^{もの} ^こ ^き ^{ときよるこ} ^{ことば} ^う ^{おのれ}
 信じて救われざらん爲なり。石の上の者は、是れ聴く時 喜びて言を受くれども、己に
^ね ^{しばら} ^{しん} ^{いざない} ^{とき} ^{そむ} ^{いばら} ^{うち} ^お ^{もの} ^こ ^き ^さ ^{しこう}
 根なくして 暫く信じ、誘惑の時に背く。棘の中に遺ちし者は、是れ聴きて去り、而し
^{どせい} ^{おもんばかり} ^{たから} ^{たのしみ} ^{おお} ^み ^{むす} ^{よきち} ^お ^{もの} ^こ ^{ことば}
 て度生の 慮と貨財と宴樂とに蔽われて、實を結ばず。沃壤に遺ちし者は、是れ言を
^き ^{せいけつりょうぜん} ^{こころ} ^{これ} ^{まも} ^{にんたい} ^み ^{むす} ^{これ} ^い ^よ ^{みみ}
 聴きて、清潔良善なる心に之を守り、忍耐して實を結ぶ。之を言いて呼べり、耳あ
^き ^う ^{もの} ^き
 りて聴くを得る者は聴くべし。

(比較用 口語訳) 主は一つの譬で話をされた、「種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、ある種は道ばたに落ち、踏みつけられ、そして空の鳥に食べられてしまった。ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。ほかの種は、いばらの間に落ちたので、いばらと一緒に茂ってきて、それをふさいでしまった。ところが、ほかの種は良い地に落ちたので、はえ育って百倍もの実を結んだ」。こう語られたのち、声をあげて「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われた。弟子たちは、この譬はどういう意味でしょうか、とイエスに質問した。そこで言われた、「あなたがたには、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの人たちには、見ても見えず、聞いても悟られないために、譬で話すのである。この譬はこういう意味である。種は神の言である。道ばたに落ちたのは、聞いたのち、信じることも救われることもないように、悪魔によってその心から御言が奪い取られる人たちのことである。岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試練の時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。いばらの中に落ちたのは、聞いてから日を過ごすうちに、生活の心づかひや富や快樂にふさがれて、実の熟するまでにならない人たちのことである。良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金口イオアン) へ